

子どもと
性のこと 愛のこと
話そう

過日、私は兵庫県のある小学校の要請で、5年生112人に性教育の授業をしました。この学校では、性教育バッシングの現在、果敢にも小1から小6まで一貫して、「命の学習」という授業を行っています。

小6には、3学期の卒業前に「死」について教えるため、『葉っぱのフレディ』（レオ・バスカーリア作）と、私が共訳した絵本『こころのなかのおじいちゃん』（モニカ・ギーダール作）の読み聞かせをしたそうで、担当の養護教諭から児童の感想文が送られてきました。

『こころのなかのおじいちゃん』は、父方の祖父が亡くなって悲しむ祖母に、6歳の男の子が「ねえ、ママのおじいちゃんが言ってたよ、愛する人は、死んでも、いつも心の中にいる」って。だから、死んだおじいちゃん、ぼくとおばあちゃんの心の中にいるんだ」と語りかけるスウェーデンの絵本です。

感想文には、「僕が感激したのは、愛する人は、死んでも、心の中にずっといる」という言葉と、それを男の子が信じて、おばあちゃんに伝える

◇ 12 ◇

私はどこから来たの？どこへ行くの？—「死」についても学ぶ「性=生」の教育—

D'ou venons-nous ? Que sommes-nous ? Ou allons-nous ?



モニカ・ギーダール 作
北沢杏子 訳
1990年 アー二出版刊



レオ・バスカーリア 作
みらい なな 訳
1998年 童話屋刊

ところですよ。このお話で、さらに命の重みについて分かりました。
「私は初めて『死』について考えました。そして、どんなことがあっても自殺なんかしないで、1日1日を大切に、自分の人生を精一杯大切に生きていきたいと思いました」

子どもたちの感想文を読みながら、性教育とはまさに「性=生」の教育であり、画家ポール・ゴーギャンの言葉「私たちはどこから来たのか？ 私たちは何者なのか？ 私たちはどこに行くのか？」の通り、生命の誕生から、からだと心の成長、そして死までを考えさせ、自分の人生を自己決定できる人間を育てる教育だと、自信を持って断言したいと思います。